



序 文

阿波学会会長 平井 松午

2019・2020年度の2年間にわたり実施してきました阿波学会による「海陽町総合学術調査」を、このたび阿波学会紀要第63号として上梓することができました。

阿波学会総合学術調査を受け入れていただきました海陽町の三浦茂貴町長、教育委員会の三浦 良教育長、ならびに海陽町立博物館の長尾正大館長、山下知之前館長はじめ、関係各位に感謝申し上げます。現地調査にあたっては、海陽町の皆様に多大なるご協力を賜るとともに大変お世話になりました。篤く御礼申し上げます。

阿波学会は昭和29年（1954）12月に設立された学術団体（事務局：徳島県立図書館）で、徳島県内各地の市町村において、自然環境や歴史文化、地域社会に関わる総合学術調査を行ってまいりました。平成27（2015）年度からは県内2巡目の調査に入り、町村合併などにより町域も広くなったことから、2年を調査期間として調査に取り組んでいます。多岐にわたる研究テーマを掲げて、いくつもの研究団体が市町村を単位に合同で学術調査を展開しているケースは全国的に珍しく、調査成果については『阿波学会紀要』という形で「総合学術調査報告書」を刊行してまいりました。

海陽町につきましては、昭和36（1961）年度に旧海南町、昭和48年度に旧宍喰町、昭和61年度には旧海部町において総合学術調査が実施され、報告書も刊行されています。海陽町は徳島県南西部の高知県境に位置し、海、山、川の自然、あるいは宍喰浦の化石漣痕、大里古墳や海部刀、伝統家屋であるみせ造りなどの文化財にも恵まれるとともに、古来より海を介して畿内や紀伊、土佐などと広く交流し、独自の文化圏を形成してきたといえます。しかしながら、海陽町を取り巻く環境も大きく変わってきました。近年はサーフィンやダイビング、釣り場のメッカとしても知られる海陽町も、南海地震対策や人口減少問題、地域活性化などが大きな課題になっています。

私どもの調査成果の一端につきましては、令和2年8月2日開催の中間報告会でも、本町の特徴的な地形・地質、貴重な植物相や文書・史料などについて報告されました。コロナ禍の中、報告会には多くの町民の方々にもご参加いただきました。令和3年3月には最終報告会の開催や報告書の刊行も予定しています。そうした機会を通じて、ぜひ町民・県民の皆様には海陽町の素晴らしさ、地域の資源や資産について再発見していただくとともに、今回の調査成果が地域の課題解決に向けての一助となることを願う次第です。

2019年度は「平成」から「令和」への新たな時代の幕開けとなりましたが、年明けから顕在化してきた新型コロナウィルス問題は瞬く間に世界に拡散し、私どもの社会生活や経済活動にも多大な影響をもたらしました。「移動」が自粛されることにより、この間、私どもの総合学術調査も制約を受けることになりました。こうした中で「総合学術調査報告書」を刊行することができたのも、海陽町の皆様、関係各位ならびに阿波学会会員諸氏、事務局のご協力の賜物と考えます。

誌上を借りて篤く御礼申し上げます。有り難うございました。